

高校における生活指導研究(I)

諸岡康哉*・生活指導研究グループ**

〈はじめに〉

私たち研究会は月1回の例会を開いてきた。研究課題はふたつあり、そのひとつは「高校における授業をどのようにつくり上げるか」であり、もうひとつは「高校における生活指導をどうするか」という問題である。例会毎に授業報告とマカレンコ『教育詩』（明治図書）をめぐる討論とを兼ねてきた。今回の報告はこの後者についてのみである。

ところで今日の高校教育をめぐる荒廃状況は非行・問題行動という形で顕著にあらわれている。多くの学校では、次々とおこる問題行動のために、処分をどうするかという会議を連日のように開かざるを得ない状況である。こうして指導課やホーム担任のなり手が全くなくなってきている。他方、若い教師がホーム担任をやる意欲があっても、校長は万全を期してか経験のある教師にしかホーム担任をさせないという傾向も出てきている。こうした悪循環は現場の教育をますますやせ細らせていくだけである。

では私たちはこの悪循環をどこで断ち切り、高校教育の再生を図っていったら良いのだろうか。私たちはマカレンコの『教育詩』から何を学べば良いのだろうか。以下、その点について考えてみたい。

1. 『教育詩』（第一部）におけるマカレンコの指導原則

私たちは一年かけてようやく『教育詩』の第I部を読み終ったところである。そして今年の3月の最終例会で若干の討論とまとめをした。そこで指摘されたことは、少年犯罪者の収容施設でマカレンコは多くの失敗を重ねながらも、「重要ないくつかの教育的指導原則」を発見していったということである。つまり初めから指導原則を持っていたわけではなかったのである。

さて、総括の中で確認された「指導原則」は次の4点である。

- 1) 集団の利益と個人の利益の統一。集団への着目。
- 2) 最大限主義・わがまま欲ばり主義の克服と限りなき楽天主義。
- 3) 前科を問わない。「履歴」の克服。
- 4) 共通の事業（生産労働）の位置づけ

上記の4点については、『教育詩』第一部の各章にわたって確認されたわけであるが、私たち現場教師はそれを自分たちの身近な事件でもう一度、確認してみる必要があろう。そうすることによって上記の4点のもつ意味が一層ハッキリし、自分たちにも応用可能な原則として体得されるだろうと思われるからである。

たとえば第一点についていえば、どの学校でもおそらく遅刻欠席のないところはないのではない。その時にふつう行われる指導はその

* 諸岡 康哉 金沢大学教育学部
 ** 高野 正緒 鹿西高等学校
 寺島美紀子 松任農業高等学校
 穴田 述 金沢商業高等学校

寺島 隆吉 金沢市立工業高等学校
 河野 信子 向陽高等学校
 入山 義雄 県立工業高等学校
 説田 富彦 大聖寺実業高等学校

当人をきびしく罰する・怒りつけることぐらいであろう。そして遅刻欠席をしない生徒にとってはそれは全くかわりのないこととして映っているのが一般的である。そしてこのような取り組みをしている限り、教師と生徒とのイタチゴッコは半永久的に続く。

これは別に遅刻欠席の問題だけではなく、掃除のさばり、授業妨害など他のあらゆる問題にも共通している。⁽¹⁾つまり全体の利益にかかわってその問題を考えさせない限り（自分の利益と全体の利益を統一的に考えて発言や行動をする生徒を育て生み出さない限り）教師は問題生徒のみを追い回すことに疲労こんぱいし、敗北していく。

この意味で「内科手術」（第4章）は集団の怒り・集団のもつ教育力を見事に示している章であり、⁽²⁾「切断手術」（第22章）は教師にまだ指導的力量がなく、集団の力量が高くない段階では退学処分もあり得るということを示している興味深い。⁽³⁾（マカレンコは教師すら追放している。第26章）しかしあくまで傍点部分の条件を自覚していることが求められるであろう。

第二に大西忠治が『教師の“指導”とは何か』（明治図書）で指摘していることでもあるが、私たち教師はともすると満点主義におちいりがちである。「遅刻・欠席をしない」という目標を掲げると、ひとりの遅刻・欠席者もいなくなるまでそのスローガンをおろそうとしない。たとえ遅刻・欠席がなくなっても、今度はこのスローガンをおろすとまた遅刻・欠席が出るかも知れない恐れから、永遠にこのスローガンをおろせないのである。

私たちは生徒に「満点主義の達成目標」を押しつけて、成就感・達成感を生徒から奪っているだけでなく、自分自身にもそのような課題を背負わせ、疲労と絶望の間をさま迷っていることはないだろうか。「ひとりの脱落者も出さない学級を！」というスローガンを掲げ、非行・問題行動を起こす生徒に全力を傾けてとり組み、その結果、他の大多数の生徒のことは視界から

消え、結局クラス全体が崩壊したという例を私たちは知っている。

「すべてが無か」という発想ではなく、学級のちょっとした前進面でも、それを発見し、それを全体の前に評価しながら、そのことを通じて生徒も教師も鼓舞される——そんな明るいトーンと楽天主義が今こそ求められているのではないだろうか。⁽⁴⁾

第三に、上記のこととも関連するが「生徒の過去を問うな」ということである。定時制のような他校からの大量退学者を抱えるところでは特におちいりやすい傾向であるが、私たち教師は、生徒の過去の処分歴や問題行動の歴史を知って、かえって指導の観点がゆがんでしまうことがある。せっかくやり直そうと思って入学してきた生徒に対して、なまじ過去を知っていたばかりに不用意な言葉を生徒にあげせかけ、その後の指導が成立しなくなった例もある。

その意味でマカレンコが、浮浪少年たちの入所と同時に彼らの衣服を皆の面前で焼きはらうという儀式は、「爆発の方法」という彼の教育方法とあわせて、もう一度考えてみる価値があるように思われる。⁽⁵⁾

私たちは生徒個人に、あるいは集団全体に与えた仕事を通じて、いくらでも生徒をつかみ、彼らを指導する手がかりをつかみとることができるし、またそのような能力を身につけなければならない。問題はどのような仕事を、誰に与えるかということである。

第四は、だから学級全体に、あるいは学校全体として、生徒に打ち込むべき課題や仕事を与えられているかということである。マカレンコは、第1コロニーにいた時は、トレプケ莊園を自分たちのコロニーとして獲得した晩に花開くであろう素晴らしい未来について少年たちに熱っぽく語っているし、⁽⁶⁾第二コロニーに移ってからはまた別の夢を少年たちに語りかけている。例えば「コムソモールのかくとく」（第27章）はそのひとつである。

しかし私たちの学校では生徒会も学級も「夢」

が与えられているところか逆に奪われていきつつあるというのが現状ではないだろうか。生徒会行事や学校行事は、進学体制のためか、あるいは「あんなひどい内容のものしかやれないのでは廃止した方がよい」という意見によって、大きく減少・廃止の方向にある。そして生徒会行事たとえば校内合唱コンクールや予餞会を通じて細々とでも存在していた学級活動も、生徒会行事・学校行事の縮小・廃止と共に衰退していく。⁽⁷⁾ というのは学級独自の行事をつくり上げ、学級独自の「夢」を語っていくことのできる力量のある教師はそれほど多くはないからである。

共通の事業（マカレンコの場合、それは主として生産労働であった）こそが、学級・学校の組織的活動を生み出すのであってその逆ではない。⁽⁸⁾ 組織だけつくっても活動はそこから自然に生じるわけではない。私たちが今回の研究テーマとして「だれに」「どんな仕事(課題)を」「どんな指示(ことば)で」マカレンコが与えていったのを調べ直してみようと思ったのは以上のような理由からであった。⁽⁹⁾

＜研究方法および研究資料＞

以下の資料は上記のような観点で、各章でマカレンコが与えた指示・課題をなるべく会話調で生き生きと再現するよう試みた。教師は「語ること」を通じて生計を立てているのであるから、まず「語ること」がうまくならねばならない。それは「語り方」でもあるし、語る「内容」でもある。それをマカレンコから少しでも盗みとりたかったのである。

この資料をつくるためにもう一度、細心の注意を払って読み返し、メモをとり・まとめ直ししているうちに、各報告者は多くのものをつかみ取ったであろうし、メ切りまでに報告を作成できなかった者も、その作業はむだではなかったはずである。

しかし実は「語る」ことのうまいひとは実は「書ける」ひとでもある。なぜなら人間は書き

ながら考えるのであって頭で考えるのではない。手が・ペンが考えさせてくれるのである。井戸端会議をいくら積み重ねても思考は深まらないが、「文章化」は否応なしに自分の思考を整理し点検しなおさざるを得ないように追い込んでいく。

だから「文章化」は生みの苦しみである同時にその陣痛をのり越えたひとは、新しい能力の開花が待っているはずである。しかし今回はマカレンコの文章から、これは！と思ったところを抜粋する作業だけであったから、真の意味での「文章化」とは言えない。来年度の研究報告はぜひとも「自分の言葉」で「自分の考え」を表明する研究・編集にしたいものだと思う。

最後に各資料の分担責任を明らかにしてこの稿を終えたい。

資料1：寺島隆吉（金沢市立工業高校・定時制）

資料2：寺島美紀子（松任農業高校）

資料3：説田富彦（大聖寺実業高校）

資料4：河野信子（向陽高校）

資料5：寺島美紀子（向陽高校）

資料6：説田富彦（向陽高校）

ご覧のように各章の間に空白のところがあるが、これは担当者の報告がメ切りに間に合わなかったところである。次年度の報告はこのような空白部分をぜひともなくしたいと考えている。また今年度に報告し残した「授業研究」についても是非、報告したい。

＜注＞

- (1) タラーネツをめぐる「ヤテリ事件」はこの意味では象徴的事件であった。ヤテリという魚の密猟をめぐるマカレンコとタラーネツの興味深いやりとりは〈資料1〉の「3. 第一次的欲望の特徴」に詳細に再録されている。（第1巻27ページ）
- (2) ラードが盗まれた時、マカレンコは「わたしはむしろこれでいいのだと喜んだ。今度こそ集団の利害・みんなの利害がものをいうことになり、皆もっと熱心に盗難の問題にとりくむだろうと期待

していた。(30ページ)」

しかし残念ながら事態はマカレンコの期待する通りには進まず、問題が本当の意味で解決されるのは老婆の持ち物が盗まれた事件をめぐるヴェトコフスキーが「知ったことじゃないって? おいみんな、これはおれたたちのことか、おれたたちのことではないのか? (33ページ)」と叫び出すまで待たねばならなかった。詳しくは〈資料2〉「4. 内科手術」参照。

- (3) マカレンコはミチャーギンの追放をめぐる次のように記している。「ミチャーギンはできるだけ早く遠ざける必要があったのだ。わたしはもっと早くこうすべきだったのだ。以前からはっきりあらわれていた集団の腐敗過程を見ながら断固とした処置をとらなかつたのであった。(153ページ)〈資料5〉「22. 切断手術」

なお教師の追放については〈資料6〉「26. 第二コロニーのできそこない」を参照。

- (4) 楽天主義についてはマカレンコの次の叙述がある。(52~53ページ)

「新しいコロニストの到来はまだかたまっていなかったわれわれの集団をひどく動揺させ、コロニーは再び巣くつに逆もどりしてしまった。」

「一般に苦しい事態であった。しかしそれでも最初の冬の間に出来た集団の青い芽はわれわれの社会の中で静かにのびていった。この芽はどんな犠牲をはらっても守り、この尊い青い芽を新しく来た連中にふみにじらせてはならなかった。わたしの大きな手柄といえば、それはその時この重要な事情に気がつき正しく評価したことであると思う。(中略) わたしはいつも勝利を目前にしているような気分であったことがさいわいしたのであった。そのためには底ぬけの楽天主義者でなければならなかった。」

マカレンコが「すべてか無か—これはよくある発作哲学ですよ」(159ページ)と述べた「最大限主義をめぐるアンナ・グリゴリエウナとのやりとり」は〈資料5〉「23. 一粒よりの種」参照。

- (5) 「この問題にたいするわれわれの態度はコロニーの最初の日から終始一貫している。犯罪者を再教育する基本的な方法は、過去を、ましてや過去の犯罪を完全に無視することであるとわたしは考えていた。」(188ページ「27. コンソモールの獲得」)

- (6) これについては〈資料2〉「6. 鉄製タンクの獲得」を参照。またこの章の前章「5. 国家的なしごと」では「国道の見張り」や「国有林の保護」といった血湧き肉おどる仕事を子どもたちに与えている。「9. ウクライナにはまだ騎士がいる」における「サマゴン(密造酒)退治」も子どもたちの心を躍らせる仕事だったが、それは同時にコロニー内部の飲酒癖との闘いでもあった。

- (7) 『教育詩』の第二部で、演劇活動が大きな役割を果たしていくことをみよ。

- (8) 農業技師シェレの到来(161ページ)は、カラバノフとミチャーギンの追放のあと、コロニーをおった沈滞した雰囲気吹き飛ばす大きなきっかけとなった。そしてこの農業労働の発展が、このマカレンコの大きな武器となった「部隊」と「指揮官」システムをつくり出すことになる。(171ページ)まさに事業(活動)が組織を生み出したのであった。〈資料6〉「25. 指揮官教育」

ところで「しごと」は同時に子どもから信頼を得るもうひとつのみちすじを私たちに明らかにしてくれている。

「あなたは子どもにたいして、あくまで不愛想で、難癖をつけられるほど気むずかしくてもかまわない。ただあなたがしごとと知識と成功で輝く存在であるなら安心して前進したまえ。かれらはあなたのあとに続き、あなたに味方し、あなたをうらぎることはない。あなたが何者であろうと、あなたの才能がなんであろうと、大工・農業技師・かじ工・教師・機関手であろうと、そんなことは問題ではない。(165ページ)〈資料5〉

「24. セミョーン 苦悩の中を行く」も参照。

- (9) なおこの研究活動は次年度あるいはそれ以降も継続していく予定である。この論文が「高校における生活指導研究(I)」となっているのはそのためであり、章の題名・資料のつけ方もその意図のもとにつけられていることを御了解いただきたい。

〈参考文献〉

1. 竹内常一「自治的活動と遊びの世界と文化活動—マカレンコの『教育詩』にそって」(『学級集団づくりの方法と課題』)民衆社、1980
2. 大西忠治「『教育詩』と私の実践」(『教師にとって実践とは何か』)明治図書、1969

3. 大西忠治「『指導』の否定的性格」(『教師の『指導』とは何か』) 明治図書, 1982
4. 水上久男「マカレンコ断章」(『季刊・高校生活指導』66号) 明治図書, 1983
5. 寺島隆吉「『非行』というのは存在するのか」(『季刊・高校生活指導』65号) 明治図書, 1983
6. 寺島隆吉「高校生における認識の順次性について」(『季刊・高校生活指導』67号) 明治図書, 1983
7. 小川太郎「マカレンコの集団主義教育」(『小川太郎教育学著作集』第4巻) 青木書店, 1980
8. 藤井敏彦「世界におけるマカレンコ研究の動向とマカレンコ教育学の評価の問題」(日本教育方法学会編『教育方法』第9巻) 明治図書, 1978
9. 宮坂哲文「学校における生活指導」(『宮坂哲文著作集』第1巻) 明治図書, 1968
10. 宮坂哲文「近代教育方法学と生活指導」(『宮坂哲文著作集』第2巻) 明治図書, 1968
11. 宮坂哲文「学校運営への生徒参加」(『宮坂哲文著作集』第3巻) 明治図書, 1968
12. 『マカレンコ研究Ⅰ・Ⅱ』 明治図書

<資料1>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
1	1920.9	(県国民教育部長がマカレンコに)	(新しいコロニーの創設)	
2. ゴリーキ・コロニーの不面目な発足	1920 最初の日	カーリーナ・イワノヴィチ	「所長」の意味	<p>カ「教育部の主任さんになるのはあなたですか？」</p> <p>マ「どうして？私はコロニーの所長です。」</p> <p>カ「うんにゃ、あなたが教育部の主任になるんで、わしは経済部の主任ということになっとる。」</p> <p>マ「それはちょっとおかしいんじゃないですか、同志セルジューク。コロニーの所長がいなくちゃ、こまりますよ。すべてのことに責任をもつ人が誰か必要です。」</p> <p>カ「とすると、あなたはコロニーの所長さんになりたいうなぐあいはいくらかなるわけですか？」</p> <p>マ「いや、必ずしもそうとはかぎりません。なんなら私があなたに服従したってかまいません。」</p> <p>(6名の生徒が到着)</p>
	1920 12/14 1921 ある冬の朝	ザドーロフ	たきぎの採集	<p>ザ「おまえ、自分で切ってきた。なかまがたくさんいるじゃないか。」</p> <p>過去数ヶ月、怒りと恨みがつもりつもって絶望と激怒の極にたっていた私は、いきなり腕をふりあげるやザドーロフの横顔をひっぱたいた。力まかせになぐった。かれはよろけ、ペーチカの上にどっとたおれた。二発目をくらわし、えりをつかんで立ちあがらせ、三発目をくらわした。……</p> <p>もしだれかが私に反対でもしてみろ、だれかれのようしゃなくとびかかり、この悪党どもをたたき殺し、撲滅してみせるといった気になっていたほど、私の怒りは荒れ狂い、</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>度を失っていた。わたしの両手にはいつのまにか鉄の火かき棒がにぎられていた。……</p> <p>私は彼らを見やり、火かき棒で寝台の背をたたきながらマ「すぐ、みんなで森に木を切りに行くか、それともコロニーからとっとと出ていってもらうかだ。」</p>
3. 第一次的欲望の特徴	1921 冬 1921.2 3	ヴォロホフ タラーネツ	寢室の掃除 食糧(魚)をみんなに供給する	<p>私はかれをにらみつけた。</p> <p>マ「私をじらさないで、掃除をしろなさい！」</p> <p>ヴ「しなかったら？つらをなぐるんですか？そんな権利はないはずだ！」</p> <p>私はかれのそっ首をつかみ、ぐいとひきよせ、面と向って本気にいった。</p> <p>マ「よく聞け！これが最後の警告だ。面なんかなぐらん。手足をもぎとってやる！“ダブル”に入れられてから泣きごといっても始まらんぞ。」</p> <p>(浮浪児15人到着)→(生徒は30人に達す。)</p> <p>タ「先生、この魚をあげます。」</p> <p>マ「うん、だがことわります。」</p> <p>タ「どうして？」</p> <p>マ「まちがっているからです。魚は皆で食べるべきですよ。」</p> <p>タ「どういうわけで？自分でヤテリを手に入れ、自分で川ではいってとったのに、皆にやらなきゃなんんですか。」</p> <p>(中略)</p> <p>マ「それ(ヤテリ)はコロニーの皆がもらったものだと私は思いますね。鍋はだれのものですか？きみのものですか？皆のもんです。ひまわりの油を君たちは炊事婦にねだったりしているが、あれは誰のものですか？みんなのもんです。たきぎは、ペーチカは、バケツは？さあどうです？私が君のヤテリをとりあげてしまえばそれまでですよ。一番かんじんなことは同志的でないことです。おれの網—それがどうしたというんです？やるなら皆のためにやりなさい。魚をつかまえるくらいのことならだれだってできるんです。</p>

(寺島 隆吉)

<資料2>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
4. 内科手術	1921.2 夜	全員に	お金を返すこと	<p>(マカレコの机のひきだしから6カ月分の給料に近い札束が消えた)</p> <p>夜になってからこれを生徒にはなし、金を返してほしいとたのんでみた。盗まれたという証拠もきめ手もなかった</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
	2日後 1日おいて	タラーネツ	犯人を教えること	<p>し、わたしが使いこんだと責められてもしかたがなかった。子ども達は暗い顔つきできいて解散した。集会の後で、はなれのへやにもどろうとすると、暗い庭先で二つの影がわたしに近づいてきた。タラーネツと小柄な、すばしっこいグードである。</p> <p>(中略)</p> <p>マ「だれが盗んだのか、おしえてくれ。わたしがはなしてみから。」とわたしは提案した。</p> <p>タ「いや、それはだめです。」</p> <p>タラーネツは秘密主義を主張した。</p> <p>マ「じゃ、かってにしまえ。」とわたしは肩をすくめ、寝室にひきあげた。</p> <p>(穴蔵の錠をこわし、コロニーの全脂脂肪・ラードと錠が盗まれた)</p> <p>(倉庫の窓が破られ、お菓子と車輪用の油が数かん消えさせた)</p>
		全員に	自分のものが盗まれていることを認識させる	<p>タラーネツはだれよりもよく知っていたのに、にえきらぬ態度をとっていた。なぜかこの事件をばくろしようという考えがなかった。コロニストたちはさかんに発言したが、もっぱらスポーツ的な興味にかられていて、自分たちが盗難にあったのだという気分にはどうしてもなれなかった。</p> <p>寝室でわたしは腹だちまぎれに叫んだ。</p> <p>マ「きみたちはいったいなんだ？きみたちは人間か、それとも……。」</p> <p>コ「こそどろだ！」遠くの“別荘”からやじがとんだ。</p> <p>コ「大どろぼうだ！」</p> <p>マ「うそをいうな！なにが大どろぼうだ！こそどろもいいところだ！自分で自分のものを盗んでいる。これからは脂肪なしだ。ざまあみろ、といたいくらいだ！せっかくの祭日もお菓子なしだ。もうどこからももらえやしない。このままおだぶつだ！」</p> <p>コ「とிட்டって、先生、ぼくたちにいったい何ができるんですか？だれが盗んだかわからないんですよ。先生だって知らないし、ぼくらだって知らないんですよ。」</p>
	翌日	全員に	コロニーが物を獲得する苦勞を知らせる。	<p>翌日わたしはふたりの子供もをつれてもう一度ラードをもらいにでかけた。いく日も日参したあげく、やっとラードを手に入れた。保管もろくにできないのかとさんざん油をしぼられたが、菓子までもらうことができた。毎晩わたしはその日の苦勞をみんなに話してきかせた。</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
	ラードが到着したその晩 数日後 ある晩	ザドーロフ	コロニストがこの主人公だということを認識させる。	<p>(そのラードが、また穴蔵から盗まれた) (ウマ小屋から、ウマの首輪が盗まれ、町に行くこともできなくなった) (盗難は毎日のようにおこった。おの、ノコ、食器、敷布、……)</p> <p>マ「ザドーロフ、白状してごらん、きみはこわいんでしょう?」 ザ「だれが? どれぼうが? そりゃ! こわいですよ。でもこわいってことよりも、先生、密告するのがなんだか、ぐあいがあるんですよ。」 マ「きみたちのものが盗まれているんじゃないか!」 ザ「へー、わたしのものが? わたしのものなんかなんにもありませんよ。」 マ「といったって、ここで生活しているじゃないか。」 ザ「生活ですって? 先生。これが生活なんですか? こんなコロニャはけっきょくものになりませんよ。むだ骨をおっているんです。見ていてごらんない、いまになにもかも盗んで逃げってしまうから。ちゃんとした番人をふたりやとって、鉄砲でももたせたほうがましですよ。」 マ「いや、番人はやとわない、鉄砲はもたせない。」 ザ「どうしてですか?」とザドーロフはおどろいた。 マ「番人をやとえば月給を払わなきゃならない。われわれは貧乏だし、それに一番たいせつなことはきみたちがこの主人公になることなんです。」 番人をやとすべきだという考えは多くのコロニストからもでていた。寝室ではこのことで口角泡をとばしていた。 (中略) コスタ・ヴェトコフスキーの言い分は、 ヴ「先生のいうとおりだ。番人なんかはいらない! コロニャで盗んではならないということが、いまはまだわからないけれど、そのうちみなわかってくる。いまだってわかっているものがたくさんいる。そのうちにわれわれが自分で見張るようになる。そうだろうブルン?」とふいにブルンにはなしかけた。 (やめた家政婦の全財産が盗まれた。)</p>
	ある日 曜日夜 おそく		ブルンを人民裁判にかける。	わたしは怒りのこもったきつい調子で子どもたちに犯罪をのべた。このささやかな布切れのなかにひたすら幸福を感じている老婆から、このコロニャでだれよりも子

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>どもたちにやさしくしてくれた人なのに、しかも助けをもとめていたとき強奪するなどということはまさに人間らしさを微塵ももっていないことであり、卑劣漢というよりも半人前の卑劣漢である。人間は自分をだいじにしなければならない。強く、しかも誇りをもつべきであり、弱い老婆から最後の布切れをうばうようなことをしてはいけない。</p> <p>(中略)</p> <p>ブ「おれのつらにおまえがなんの関係があるんだ。なにをいきまいていやがるんだい？ どうせコロニーの所長にはなれやせん。必要なら、先生がこのつらをなぐるさ。おまえの知ったことじゃない！」</p> <p>ヴェトコフスキーが席からとびだした。</p> <p>ヴ「知ったことじゃないって？ おいみんな、これはおれたちのことか、おれたちのことではないのか？」</p> <p>「おれたちのことだ！—みな口々にさげんだ。—おまえのよこつらを先生よりもじょうずにおれたちでなぐってやる！」</p> <p>(中略)</p> <p>とうとうブルンは頭をあげ、わたしの目をじっとみつめ、やっとのことで涙をこらえながら、一語一語に力を入れ、ゆっくりいった。</p> <p>ブ「ぼくは……もう……決して、盗みはしません。」</p> <p>マ「うそを言うな！ おまえはもう委員会でもそう約束したじゃないか。」</p> <p>ブ「委員会と先生とはべつです。気のすむように罰して下さい。ただコロニーから追いださないでください。」</p> <p>マ「コロニーのどこがおもしろいんだ？」</p> <p>ブ「ここが好きなんです。学校もあるし、ぼくは勉強したいんです。いつも腹がすいているもんだから、盗んだんです。」</p> <p>マ「なんなら、よろしい。三日間パンと水だけで禁錮だ。タラーネツに手をだすな！」</p> <p>ブ「はい！」</p> <p>三日三晩ブルンは寝室のそばの小さなへやにとじこめられていた。そこは昔のコロニーのおじさんたちの寝室であった。かれはわたしの許可なしではへやから出ないと誓ったので、とびらには錠をかけなかった。最初の日じっさいかれにパンと水だけをはこばせたが、二日目はかわいそうになり、料理をはこばせた。ブルンはどう然と拒絶しよ</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)	どんな指示(ことば)で
				<p>うとしたが、</p> <p>マ「やせがまんはいいかげんにしろ！」</p> <p>とわたしにいかつされると、ニヤリと笑い、肩をぐっとそびやかし、はしをとった。</p>
5. 国家的なしごと	1921 2月末	全員に (ザドーロフ)	国道の見張り	<p>(ハリコフの大道に集団強盗が毎夜あらわれた。)</p> <p>(ピストルをもったマカレンコとこん棒で武装したコロニストが森を探索した。)</p> <p>(県執行委員会からゴーリキー・コロニャに感謝状が送られた。)</p> <p>国道の見張りは興味満点のしごとであった。</p> <p>(中略)</p> <p>……わたしはどの隊にもついていくことになったが、ピストルはやはりザドーロフにもたした。かれの誇りたかきたのしみをうばいたくなかったからである。</p>
		全員に (ブルン)	国有林の保護	<p>この冬われわれはこの他にコロニャのわくをこえた国家的な事業にとりかかった。コロニャに営林署の役人が来て森の監視をたのんだ。盗伐が多くて、営林署だけでは人手不足で手がまわらないというのである。</p> <p>国有林の保護というしごとはわれながらわれわれの値うちをぐんとたかめ、とびきりおもしろいしごとでもあったし、そうとうの利益もともなうものであった。</p> <p>(中略)</p> <p>ブルンはわたしから二連発をうけとり、三人で林のなかにはいる。</p> <p>道徳的説得や怒りよりもむしろこの興味深い損得につながる闘いこそがよき団体精神の最初の芽を生み出したのであった。毎晩われわれはその日のできごとについて討論し、談笑し、空想し、勇ましい事件のたびごとに親密になり、その名をゴーリキー・コロニャという一つの統一体にうちかためられていった。</p>
	1921.3	全員に	夢を語る	<p>(トレプケ荘園の発見)</p> <p>われわれは廃墟のなかを歩きまわり、ここが寝室、ここが食堂、あそこがしゃれたクラブ、ここが教室と空想にふけた。</p> <p>疲れはしたが元氣いっぱいに戻ってきた。寝室では未来のコロニャはああだ、こうだとにぎやかに論じあっていた。</p> <p>(中略)</p>
			トレプチ荘園の獲得	われわれの計画は県執行委員会で検討された。荘園のあ

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>としまつには以前から当局も頭を痛めたことがわかった。わたしはその機会に、生きた集団がすでに生まれているコロニーの貧しさ、暗い将来、見すてられているようすを語った。県執行委員長は、</p> <p>「あそこはあるじが必要なのに、こっちではあるじどもがぶらぶらしておる。やってみたまえ。」といった。</p>

(寺島美紀子)

<資料3>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
7. 「のみにいいところがある」	1921年 4月	コロニスト	教師の反応に対する 好奇心	<p>「ワーシカがコロニーにいません……朝食も食べていません。ずらかったんです。ズバトのところへ行っただです。」</p> <p>庭でわたしは子ども達にかこまれた。ワーシカの逃亡がどんな印象をわたしにあたえたかを面白がっていたのだ。</p> <p>ワーシカはめぐまれたコロニストではなかったが、かれの逃亡はわたしの心を重くした。われわれのささやかな奉仕をうけとめず、よりよいものをもとめて出て行ってしまったことがいまいまいしくもあり悲しくもあった。同時にこう貧しくてはわがコロニーは何人をもつなぎとめておくことができないと考えていたので、わたしは子どもたちに行った。</p> <p>「あれがどうなろうとかまわない！ 去るものは追わずだもっと大切なことがある。」</p>
		ソフロン・ゴロヴァニ	かじ工の教官	<p>ソフロンは富農とかじ屋がいっしょになった化物で、富農の自分であったが、腕のいいかじ屋で、かれの腕はその頭よりも比較にならぬほど啓蒙されていた。</p> <p>ソフロンは、ここに自分の金敷と炉をうつし、多少の道具を加う、ここで教官として働くことを申し出た。</p> <p>カ「あのごくつぶしのソフロンめ、だてや酔狂でここにきてるんじゃない。じつはあんた……」</p> <p>マ「どうしたらいいかね？」わたしはカーリーナ・イワノヴィチの意見を求めてみた。</p> <p>カ「どうしたらって？ そんなところに好きこのんでくるものがありますかい？……」</p> <p>カ「ごくつぶしの百姓め、どうせかじ場をとりあげてしまいうだろうが、それがなんになる？ どうせ遊ばしておくにきまっとる。そんならいいそのこと、ここにかじ場を作っとくほうがましですわい。……」</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
	夏	コズイリ	車大工	<p>ソフロンは部落からコズイリをひっぱってきた。コズイリは何かというと十字をきり、自分の妻君の名をきいただけでもふるえあがった。コズイリは車大工であった。</p> <p>コ「じつはみなさん、よくぞおお、神様、この老ぼれをよんでくれました。お願いがあるんでございます。わしもここで住まわしてもらいます。」</p> <p>マ「ここには住む場所なんかないです。」</p> <p>コ「いいえ、いいえ、どうか、ご心配なさらないでください。自分で見つけます。神様がどうか助けてくれます。…」</p> <p>マ「じゃ、そうしてください。」</p> <p>かれの信心は当人には重大でも、まわりのものにはすこしもがいのない一種の精神病のように見られていた。そのうえコズイリは宗教べつ視思想を教育する上にある程度積極的な役割をはたした。</p> <p>(増援隊がやって来た)〔レフチェンコ、マルーシャ、カラバノフ、ブリホジコ、ゴロス、ソロカ、ヴェルシニョフ、ミチャーギン〕</p>
性格と文化	8. 1921年	ザドーロフ	けんか好き	<p>わたしは絶対に喧嘩の仲裁をしたり、どなりつけたりしないようにしていた。</p> <p>カ「はやく、はやく、おまえさん。どくつぶしめ、ほっときゃ、殺し合いになりますぞ。」</p> <p>しかしわたしは戸口にたってながめている。しだいに子どもたちはわたしに気がついて静まっていく。あたりが急に静かになっていくのに、たけり狂った少年もはっと我にかえり、ナイフをかくし、げんこつをおろし、威勢のいいたんかや悪口は途中でとぎれてしまう。しかしわたしはだまりつづける。</p> <p>ついに寝室は不気味な重苦しい静けさにつつまれ、緊張した息づかいのうつろな音さえ静まっていく。</p> <p>そのとき突然わたしが爆発する。腹のそこからの怒りの発作におそわれ、こうしなければだめだと自覚し確信して爆発する。</p> <p>マ「刃物をテーブルの上におけ／＼はやく／＼畜生／＼」</p> <p>テーブルの上に刃物がつみあげられる。沈黙はいせんとしてつづく。テーブルのそばに微笑をうかべながら立っている。このときわたしにとってただひとりの親しい人におもわれたかわい、すばらしいザドーロフである。わたしはさらに短かく命令する。</p> <p>マ「ハンマ／＼」</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
		チョポト	追 放	<p>ザ「一つはばくがもっています。とりあげたものです。」 みな首をうなだれて立っている。 マ「寝ろ！」 わたしはみなが床のなかにもぐりこむまで寝室からでないでいる。 翌日子どもたちはゆうべの騒ぎになるべくふれまいとしている。わたしもそれを絶対にほめさせない。 あるけんかのあとで、わたしはいちばん威勢のいい刃物の戦士のひとりチョポトにわたしのへやに来るように命じた。 マ「おまえはコロニーから出てもらうことになりそうだ。」 チ「どこへ行けというんですか？」 マ「刃物で切ったはったのできる自由の天地へ行きたまえ。きょうおまえは食堂で席をゆずらなかったといって、ナイフで切りつけた。暴力か刃物がものをいうところでもさがしてみたらどうだ。」 子どもたちはみなチョポトをコロニーに救ってほしい、かれにたいして責任をもつからとわたしにたのみこんだ。 マ「なんで保証するのですか？」 みなわからない。 マ「なんで保証するのですか？それでもかれがナイフを手にしたら、きみたちはどうする気ですか？」 「そのときは追い出してください。」 マ「とすると、保証しないということになりますね？いや、やはり出ていってもらおう。」 チ「先生、さようなら。いろいろ教えていただいてありがとうございました……。」 マ「さようなら。わるく思わないでくれ。こまったらおいで。ただし二週間以内はだめだよ。」</p>
9. 「ウクライナにはまだ騎士がいる」		ザドーロフ タラーネツ ヴォロホフ カラベノフ	サマゴン退治 (飲酒癖との闘い)	<p>コロニーに酔っぱらいが現われた。 飲酒癖との闘いではコロニストを攻撃してもだめであって、攻撃すべき相手はほかにいることを承知していた。わたしは町に行って、わが村ソビエト全区域の密造酒とকাশくない闘いを行なう委任状をかくとくした。 マ「諸君、きっぱりいっておく、だれにも酒を飲ませてはならない。村の密造徒党をけちらしてみせる。わたしをたすけてくれるものはいないか？」 大部分はためらったが、 カ「そいつはいいことだ。とてもいい。あのグラクどもを</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
		カラバノフ (ブルン)	弱い同志を守る(かけトランプとの闘い)	<p>ぎゅっといわしてやらにゃー。」</p> <p>わたしはザドーロフ、ヴォロホフ、タラーネツの三人に助だちになってもらった。</p> <p>タ「一軒を攻撃すれば、他の家ではかくしてしまう。三人じゃたりない。……もっとなかまをあつめたほうがいい、じゃないと、やられます。」</p> <p>ザ「やられるって？ばかなカラバノフひとりつれていけばたくさんだ。……この大将をこわがっているんだ。」</p> <p>ザ「フォードルあわてるな。……あすは村のやつらが酔っぱらわんうちに出かけなきゃならん。なあ、グリツコ？」</p> <p>ヴ「うーむ。」</p> <p>かけトランプという新しい災厄がもちあがった。</p> <p>マ「トランプはだんこととして禁止する。これからトランプをやってはいけない。トランプをやるということは友だちのものを盗むのも同然だ。」</p> <p>マ「トランプはばかげたことだ。多くのコロニストがパンや砂糖をたべないでうえている。オフチャレンコはトランプのためにコロニャから逃げだしたんだ。いまじゃ泣きながら町の中をうろついている。」</p> <p>マ「弱い同志を守ってやるというものがコロニャにはないということになる。このわたしが守ってやらなければならない。わたしはばかばかしいトランプのためにみんながうえたりからだをこわしたりするのをだまって見てはいられない。それは絶対許さぬ。さあ、どっちかをえらびなさい。わたしにしたって寝室をしらべたりしたくはない。しかし、わたしは町でオフチャレンコにあって、かれが泣きながら身をほろぼして行くのを見ると、すましてはいられなくなった。さあ、なんなら、これからとばくはやらないと約束しようではないか。約束できますか？どうもみんなの誓いはあやふやなのが気になるが……。ブルンにしたって……。」</p> <p>ブ「うそです。先生。うそをいうなんてひどいや／＼……もし、先生がうそをおっしゃるなら、ぼくも……。ぼくはトランプについては何も誓いませんでした……。」</p> <p>マ「そうそう、ごめん、ごめん、わたしがわるかった。きみから一度にトランプと、それから酒のことも誓わしておくことを、うっかり忘れていたよ。」</p> <p>ブ「ぼくは酒は飲みません……。」</p> <p>マ「よろしい。それはあたりまえだ。さてどうだ？」</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>カ「みんな問題は簡単だ。お互いのものをとり合うなんてことは無意味だ。みんながいくらうらもうが、なんといおうが、ぼくはとばくに反対だ。外のことは大目にみておくが、とばくだけはばらしてやる。なぜならぼくはオフチャレンコがコロニーからでていくのを見ていたんだ。まるで墓場に追いたてられるようなものだった。みんなの知っているようにオフチャレンコはどろぼうの才能のない男だ。オフチャレンコをはだかにしたのはブルンとライーサだ。ぼくが考えるにはふたりでさがしにいて、つれもどさないうちはコロニーに入れないことにしようと思うんだが。」</p> <p>ブルンはもろ手をあげて賛成した。</p>

(説田 富彦)

<資料4>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
10 「社会教育の功労者」	1921	イワン・イワノヴィチに	「どろぼうと密告者」ごっこをする際、めめしい戦術にできたので	<p>マ「そういうやり方はまちがいだ、子どもはしんぼう強く勇気のある人間に成長しなければならない、危険をおそれるようではいけない、とくに肉体的苦痛を恐れないように育てなければならない。」</p> <p>その後、イワノヴィチは、手心を加えずうちのめしてやるようになる。</p> <p>みんなをえらく感動させたのは『幼年時代』と『どん底』であった。マキシム・ゴーリキーの生活はまるでわれわれの生活の一部になった。比較の対象、あだなの根拠、議論の下地、人間の価値の尺度となった。</p>
11 勝利の種まき	9月	エカテリーナ・グリゴリエヴナは村ソビエト議長ルカ・セミューノビッチとふたりの村人に	<p>コロニストの看護婦として世話をやく。</p> <p>播種機を自分のものとするために。</p>	<p>彼女は母親のように小言がうまく、そのあらゆる弱点を知っておりだれのことばも信用せず、どんな罪も見のがさず、どんな無作法にも遠慮なく腹をたてた。</p> <p>いとも簡単なことばで、いとも人間的な言葉で、コロニストと話し合うコツを心得ていた。</p> <p>ルカ「わたしとこのふたりをなぐった子どもたちをよびだしてください。」</p> <p>マ「……もし、なぐれらたのでしたら、どこへなりと訴えて下さい。いまここにだれもよびだすわけにはいきません。ほかになにかご用でも。なんのためにコロニーにいらしたのですか？」</p> <p>(中略)</p> <p>マ「じつはですね。ひとの畑に無断で乗り入れたとき押収</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>したものとして区民警察署に送るつもりです。ところでおなまえをおうかがいしたいのですが。」</p> <p>私は一步もゆずらず、播種機をひきわたす調書の作成を要求した</p> <p>(中略)</p> <p>ザドーロフ「おじさん、いいかげんにしたらどうですか。土地はわれわれのものだ。おとなしくひっこんでたほうが身のためですよ。」</p>
12 ブ 糧 ラ ト 委 員 チ ェ ン コ と 地 区 食	6月	アントンに	病気のコロニストのため、馬車を使って医者を呼ぶ。	<p>マ「いいかい。医者を迎えに行くんだよ！」</p> <p>アントン「病人なんかしっちゃんないよ！ルイジーだって病気ですよ。だのに医者をよんでくれない。」</p> <p>私は激昂した。</p> <p>マ「ウマ小屋をすぐオプリシコに引きわたせ…おまえ相手じゃしごとにならん！」</p> <p>(中略)</p> <p>アントン「わたしますよ。……やりたいやつにやらしたらいいさ。ぼくはコロニーにはいたくない。」</p> <p>マ「いたくなければ、いなくてもいいさ。去るものは追わずだ！」</p>
	4月	地区食糧人民委員(アゲーエフ)に	にせの食糧税を奪いかえそうとして来たのに対して	<p>マ「わたしたちは許可なしに食糧税を受納しました。」</p> <p>アゲーエフ「“許可なし”とはなにごとです？これはどういうことか知っておりますか？いますぐ逮捕されるんですぞ……中略……」</p> <p>マ「……中略……どなるのはやめてください。必要とお思いいになる措置をとってください。」</p> <p>アゲーエフ「なにがなんだかさっぱりわからん。」</p> <p>アントン「ウマが4日も食わずにいりゃ、食糧税もへちまもあるもんかい。あんたの栗毛のウマに4日間新聞ばかり読みきかせたら、あんなにしてコロニーに飛んでこられますか。」</p> <p>アントン「あなたのところでは借方に記入してあるんですか？いったい」</p>

(河野 信子)

<資料5>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
22. 切 断 手 術	1923 夏の末 秋			<p>(子どもたちは自分の約束をまもらなかった。)</p> <p>(ルカ・セショーノヴィチの養蜂所からハチみつとハチのはいった巣箱を二つかっぱらってきた。)</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
		ミチャーギン	コロニーからの追放	<p>マ「いや、ミチャーギン、きみがわれわれをそっとしておいてくれたら、それがいちばんいいんだ。もうきみは一人前の人間だ。きみはわたしとはどうしても意見が合わない。別れようじゃないか。」</p> <p>ミ「ばくもそう考えているんです。」</p> <p>ミチャーギンはできるだけ早く遠ざける必要があったのだ。わたしはもっと早くこうすべきだったのだ。以前からはっきりあらわれていた集団の腐敗過程を見ながらだんことした処置をとらなかったのがであった。これはもうはっきりしていた。スイカの事件や養蜂の略奪はそれだけではべつに問題ではなかったかもしれないが、これらの事件にたいするコロニストたちの不断の注意、夜も昼もそんなことのためについやされる努力とそんな印象にみたまされた一日一日はコロニーの気風の発展の完全な停止、したがって停滞を意味するものであった。この停滞を背景にしてコロニストの放じゅう、コロニーとしごとに対する一種とくべつの卑俗な態度、だれきった空虚な冷笑、人をつくった皮肉な調子、こういうしまりのない情景は注意深い目には明らかとなった。ペルーヒンやザドーロフのように、こういうことには加わらなかったものまでが、かつての個性の輝きをうしないはじめ、さびついてきたのをわたしは見てとった。</p> <p>(追放したミチャーギンと5人の子どもがウマ小屋に集まった。)</p> <p>カラバノフは熱っぽい目でわたしを射るように見つめていた。かれは、突然バネのように全身をちぢめると、ヘビのようにすばしい動きでわたしの机の上ののびあがり、燃えるような目をまっすぐわたしのめがねにもってきた。カ「先生、ばくのいうことをよくきいてください！ばくもミチャーギンといっしょに出ていきます。」</p> <p>マ「きみたちは屋根裏でなにをたくらんでいたのです？」</p> <p>カ「じつをいえば、くだらんことなんですが、しかしコロニーのためにはならんことです。ばくはミチャーギンといっしょにでていきます。どうせばくたちは先生とははだが合わないんだから、自分で幸福をさがしに行きますよ。ここにはもっとりっぱなコロニストがきますよ。」</p> <p>かれはいつも少々甘えるところがあったが、いまは侮辱された人間の役をやっている。わたしが自分の残酷さを恥じて、ミチャーギンをコロニーに残してくれるかもしれ</p>
	夜2前ごろ	カラバノフ		

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>ないと期待していたようであった。</p> <p>わたしはカラバノフの目を見ながら、もう一度たずねた。マ「なんのためにきみたちは集まったのですか？」</p> <p>カラバノフはなにもこたえず、うかがうようにミチャーギンを見た。</p> <p>(中略)</p> <p>わたしは机に向かいカラバノフに証明書を書いた。かれは黙って書類を受けとるとわたしがさしだした五ルーブリの札をさげすむようにながめていった。</p> <p>カ「いりません。さようなら。」</p> <p>かれは発作的に手をさしだし、かたく、痛いほどわたしの手をにぎり、なにかいいたげだったが、いきなり戸のほうにかけだし、闇の中に消えた。ミチャーギンは手もさしださず、別れのあいさつもしなかった。かれはジャンパーのすそを威勢よくかき合わせると、忍者のような足どりでカラバノフのあとにつづいた。</p>
23.	1923 秋の末	エスカテリ ーナ・グリ ゴリエヴナ	第二コロニーの修理	<p>(コロニーに暗たんたる時代がやってきた。)</p> <p>(農業の失敗)</p> <p>マ「それはありふれたインテリの弱音ですよ、アンナ・グリゴリエヴナ。ありふれた泣言ですよ。そういう気持はたまたまおこっただけのことですから、それはどうこう言えませんが。あなたはミチャーギンもカラバノフも自分の手でなんとか押さえつけたいと思っていらっしゃるのでしょうか。そういう承認しがたい最大限主義、わがまま、よくばりはそののちに嘆息や落胆にかわるんです。すべてか無か — これはよくある発作哲学ですよ。」</p> <p>わたしは新しいしごとをつぎからつぎと、きびしくコロニーにあたえ、全コロニスト社会から以前通りの正確、入念な働きを要求した。</p>
一粒よりの種		全員に	軍事教練の導入(戦闘遊びの基ソ)	<p>なぜかわからないが、きっとわたし自身にも不可解な教育学的な本能からであろう、わたしは軍事教練に力を入れた。</p> <p>(中略)</p> <p>こうしてコロニーに、のちにわれわれの音楽の根本的なモチーフの一つとなった戦闘遊びの基礎がきずかれたのであった。</p>
		全員に	農業の救援隊をむかえ、農業に全力投球	<p>(農業技師シエレをまねいた。)</p> <p>(プリホジコは“スグリ”畑に、アントンはプランどおりに馬を働かせ、カーリーナ・イワノヴィチは食糧の運搬を</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				ことわられた。)
24. セミ ヨー ン「苦 悩の中 を行く」	1924 2月始 1週間 後2週間 後	カラバノフ "	金の受領 再び "	<p>コロニストはシエレを心ひそかにあこがれるようになった。</p> <p>(中略)</p> <p>わたしはこの共鳴を意外とは思わなかった。子どもというものは自分にやさしく自分をかわいがってくれる人だけを愛し、うやまうものであるといったインテリの確信を裏切るものであることをわたしはすでに知っていた。わたしはかねてから子どもは、すくなくともコロニーにいるような子どもは全然ちがったタイプの人間をいちばん尊敬し、いちばん愛するものであると。確信にみちた的確な知識、手腕、技能、黄金の腕、寡黙、不言実行 — これこそが子どもたちをいちばんひきつけるのである。</p> <p>(カラバノフがコロニーにやってきた。最初の日からかれはシエレの片腕になった。)</p> <p>(財政部へいって五百ルーブリ受けとってこさせた。)</p> <p>セミヨーンはわたしに会うと、わたしを敬遠するかのようにならぬ陰気にあいさつをした。</p> <p>マ「二千ルーブリを受けとってきてくれ。」</p> <p>というわたしの命令を同じように陰気にききおわると、かれは長い間、ポケットにブローニングをしまいながら、非難するようにわたしの方をみつめていたが、一言一言力をいれて、</p> <p>カ「二千ルーブリ?もし、ぼくが金をもってこなかったら?」</p> <p>わたしはいきなり席をはなれて、どなりつけた。</p> <p>マ「ばかなはなしはよしてくれ。きみはいま任務をあたえられたんだ。遂行してこい。『心理学』をいじくりまわすときではない。」</p> <p>カラバノフは肩をそびやかすと、</p> <p>カ「それなら……。」とあいまいにつぶやいた。</p> <p>かれは金をもってかえると、</p> <p>カ「数えてみて下さい。」とわたしにうるさく催促した。</p> <p>マ「なんのために?」</p> <p>カ「数えてみて下さい。お願いします。」</p> <p>マ「きみは数えたんでしょう?」</p> <p>カ「数えてみて下さい、ね。」</p> <p>マ「うるさい!」</p> <p>かれはなにかに締めつけられたかのように、のど元に手をやると、えりをひきやぶり、よろめいた。</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>カ「先生はぼくをからかっているんです！ぼくをこんなに信用するなんておかしい。おかしいですよ。おわかりになりますか？おかしい！先生はわざと冒険をしているんです。わかってますよ、わざと。」</p> <p>(中略)</p> <p>マ「セミョーン、変ですね、きみは。金にはいつも冒険がつきものです。コロニーへ札束をもってくるには危険がともないます。しかしわたしはこう考えるのですーもしきみがやるなら危険はすくない。きみは若いし、強いし、ウマもしょうずだし。どんな悪党からだって逃げおおせます。わたしならすぐつかまってしまうでしょうが。」</p> <p>セミョーンはうれしげに目を細めると、</p> <p>カ「アントン・セミョーノヴィチ、先生はなんてずるい方なんでしょう！」</p> <p>マ「ちっともずるくはないさ。これからはきみも金のうけとり方をおぼえなさい、これからもやってもらうことにします。なんのずるさもないよ。わたしはなんにも心配しちやいせん。きみがわたしとおなじように正直な人間だということは以前からちゃんと知っていたんです。きみはそれを知らなかったのですか？」</p> <p>カ「いいえ、ぼくは、それをご存じないのかと思っていました。」</p>

(寺島美紀子)

<資料6>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
25. 指揮官教育	1923年 冬	ブルン	たきぎ部隊の指揮官 →第二コロニーの 温室造り	<p>われわれのコムーナ員は他のだれよりも革命闘争の軍事パルチザンのロマンチズムにあこがれをもっていた。裁判あそびで敵陣営にいれられたものでさえ、そこにまっさきにロマンチズムを見出したのであった。</p> <p>わたしはコロニストの革命的本能からでてきた、このなかば無意識の遊びをさまたげたくはなかった。</p> <p>ブルンはたきぎ部隊でつねに第一バイオリンをひいていたが、かれのこの名譽には誰も文句をつけようがなかった。かれは例の遊びで首領とよばれるようになった。</p> <p>マ「首領というのはどうもおかしいね。山賊でなきゃ首領とはいわない。」</p> <p>「山賊だって？パルチザンにだって首領はいました。赤色パルチザンにもたくさんいましたよ。」</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
	春～夏	ザドーロフ	第二部隊の指揮官 (コロニーの作業場)	<p>マ「赤軍では首領とはいわないよ。」</p> <p>「赤軍では指揮官だ。でもぼくたちは赤軍まではなかなか。」</p> <p>マ「そんなことはない。指揮官のほうがいい。」</p> <p>ザ「どうということになるんですか？ブルンの部隊はいるけど、残りの連中はどうするんですか？」</p> <p>すぐに考えがまとまった。……それから部隊の編成がとんとん拍子にすすんだ。</p> <p>(第二コロニー…指揮官をべつにして第三・第四部隊、女の子たち…ナスチャ・ノチェヴナヤ指揮の下、第五部隊→職能によって分けるという考えから、第一はくつ工、第二はウマ小屋…第六はかじ工…第十はブタ飼係)</p> <p>(部隊の体系は複雑化された)</p> <p><input type="checkbox"/>常設部隊(第一次集団)</p> <p>各コロニストは、一定の指揮官がついている自分の所属部隊、作業場での一定の地位、寝室場所、食堂での場を知っていた。</p> <p><input type="checkbox"/>混成部隊(臨時の作業部隊)</p> <p>混成第一</p> <p>混成第二</p> <p>混成第三「K」、「П」…温床、「O」…野菜畑、「P」…修理、「C」…果樹園</p> <p>混成部隊のナンバーはまもなく30にたった。</p>
	1923年	ロジムチク (第二コロニーの教師)	追放	<p>ロ「ここでこんな取扱いされるとは、夢にも思っていませんでした！…なけなしのかねで雌ウシを買いそれをコロニーにつれてきたんです。…わたしのウシだけが飢えているのです。わたしのウシがあんな取扱いをうけないだけの価値はもっているつもりです。」</p> <p>マ「失礼ですが、ロジムチクさん、どうしたというんですか？あなたのウシはなんといっても私有物です。いっしょにはできないでしょう？それにあんたは教育者ですよ。いったいあなたは生徒に対してどういう立場にある方なんでしょうか？」</p> <p>ロ「なんですって？わたしはただでやってもらうなどとはすこしも考えていません…。」</p> <p>ヴ「これはいったいなんだ？なぜロジムチクはコロニストのつくった野菜畑でジャガイモを掘るのだ？…」</p> <p>ザ「問題はジャガイモじゃない。…ただあのロジムチクはなんのために必要なんだ？…」</p>

	いつ	だれに	どんな仕事(課題)を	どんな指示(ことば)で
				<p>タ「教師はどのように働かなければならないかをわれわれは知っている。ところがロジムチクはどうだ?…」</p> <p>わたしは子どもたちに善処を約束した。…わたしはかれを一对一で責めはじめた。しかし、…ロジムチクはいきりたってわたしの話をささぎった。</p> <p>ロ「これはだれかがたくらんだことだが、だれがわたしにけちをつけているのかわたしは百も承知です。—あのドイツ人めだ!…イヌがコロニストのキビをただでこっそり食っている。自分が農業技師で、みんなに信用されているのをいいことにして。」</p> <p>マ「どこから、そんなことをきいてきたんですか?」</p> <p>ロ「わたしは根も葉もないことはいいません。そんな人間とはわけがちがう。ほら見てください…。」</p> <p>マ「これは何ですか?」</p> <p>ロ「これが証拠ですよ。これがミロルドのふんです。ふんですよ、わかりますか?…」</p> <p>マ「ロジムチク、コロニーからでたほうがよさそうですね。」</p> <p>ロ「“でる”とはどういうことですか?」</p> <p>マ「一刻も早く出ていってください。きょう命令であなたにやめてもらいます。依頼退職ということにします。それがいちばんいいでしょう。」</p> <p>ロ「わたしは黙って引きさがりませんからね!」</p> <p>マ「よろしい、引きさがらんでも、あなたを首にする。」</p> <p>(第二コロニーをどうしようか?“トレプケ族”はわるいコロニストになりつつある。)</p>

(説田 富彦)